

三瓶構成員からのご意見

○研究成果の社会還元が求められる中で、技術シーズを社会実装する

●オープンイノベーションの手法はどうあるべきか

- ・オープンイノベーションの重要性は、クローズする部分を研ぎ澄ませながら、それをさらに優位な技術とするためにオープンな部分をできるだけ広げることにある。それを意識しつつ、オープン化に際しては日本が戦略的にどのようにオープン化領域を設定し、その部分のオープン化で優位性を発揮できるようにすべきかを検討する必要がある

●技術シーズと社会ニーズの間の「死の谷」について

- ・一方で情報通信分野の進展、とくに 5G 以降無線アクセス技術の重要性がより高まる時代においては、3GPP においても、マーケットを含めてどのような世界を構築するかが最初に想定され、そこから必要な技術がブレークダウンされていく
- ・この場合は、「死の谷」ではなく、いつどのような形でサービスを展開するかが課題となる
- ・少なくとも、特に無線通信に係る情報通信システム分野では、技術シーズと社会ニーズのギャップを議論している時代ではないと考えられる
- ・ただしそのためのデバイス技術などは別である

○産学連携及びオープンイノベーションに資する研究拠点の在り方、競争的資金を含めた国の研究開発プログラムの在り方について

●産学官の組織的連携については、国立研究開発法人が軸となった枠組みが適切と考えられる

- ・その際、国立研究開発法人は、自ら行う研究では連携の中核となるものを開発しつつ、以下の活用で研究分野の進展を図るべき
- ・国プロなどの実施による中核技術からの、マーケットをにらんだ進展型研究
- ・国立研究開発法人からの委託研究による研究領域レベルの深化
- ・国立研究開発法人と大学との連携（情報交換レベルを含む）によるグローバルな視点の深化（これは共同研究契約に縛られることなく情報認識という観点での連携）
- ・連携を現実的に進めるためのテストベッドとしては、技術の進展に同期した柔軟な構築が必要
- ・1つのシステムが1社で対応できる範囲を大きく超えた技術分野において、様々な、多様な技術開発が必要なもののためにテストベッドを構築する必要あり

●政府対応について

- ・失敗を恐れない対応ができることが望ましく、そのためには、失敗した場合の分析の
ち密さと、方向性の再構築能力を評価尺度とすることが必要
- ・研究プロジェクトの中では、外部の評価を得る運営委員会を設け、運営委員会におい
て失敗に対して緻密に分析すること、失敗の結果としての検討分野の再構築を議論し、
運営委員会で認められたら当初計画を柔軟に変更することができるようにしておく
ことが必要

○人材育成と国際標準化への対応

●人材育成については、研究の方向性を常にプラスの方向へ進化させるという能力が必要

- ・ただし、それが自分だけの考え方で実施するのではなく、他の人を説得して計画を変
える能力を持つことが重要

●他の機関との研究協力においては、

- ・国と大学、国と産業界といったそれぞれの連携の枠組みにおいて、特に、世界の流れ
を実時間で認識することを常に意識すべき
- ・単に情報を集めるだけでなく、情報を活用し、インテリジェンスに変える能力に進
化させることが大事